

●街灯に絵地区をPR

北方町は全国でもただ一つの「千支(えと)の町」として知られる。一九八七(昭和六十二)年、県の進める新ひむかづくり運動の中で千支の町づくりを提唱、イメージアップ作戦として千支の町看板設置、シンボルマーク作製などに取り組んできた。

町の南東部の速日(はやひ)の峰(八六八メートル)に九六(平成八)年オープンした「ETOランド」もその一つ。国内最大級の直径五十メートルの三枚羽の大風車が回り、施設の電気のすべてを賄っている。レストラン、宿泊施設、展望風呂、研修施設、アスレチック広場、風と電気の博物館、ゴーカート、スーパードライダー、人工芝スキー場などがそろう、千支の町売り出しに一役買っている。

北方町の歴史をたどると、旧延岡藩時代、村々は門(かど)と呼ばれていた。一八七一



「ETOランド」。憩いのレジャーランドとして千支の町を演出する

(明治四)年の廃藩置県後、戸籍の整備や税制の改革が進み、門という古い呼称は改められ、千支を用いた地域区分が進められた。八九(同十二年)年、町村制が施行されたとき、北方町(当時は村)の千支地名は出来上がっていたときから残っている。

曾木地区が子(ね)、角田地区が丑(うし)、川水地区が卯(う)というように、町内は子から亥(い)までの十二の地区におさまった。延岡藩に仕えた天文測量方の古川氏の子孫に定明という人がおり、この呼称を提案したと伝えられている。

千支は古代から時刻、方位、暦などに使われていた。子から村をぐるっと一回り。誰にでもよく分かる集落の配置であった。

町村制施行から百年を経た現在でも、町の行政は千支地名によって円滑に進行している。

町を通る国道218号の橋にも「天馬大橋」「千支大橋」の名が付いている。国道、町道沿いにはそれぞれの絵を描いた「千支の町街灯」、集落の入り口には「千支看板」が立つ。また子地区にある曾木駐在所はネズミの形をしており、「ネズミ駐在所」と呼ばれている。

北方町には天然の名勝地が多い。国道218号の横峰から奥に入ると、比叡山(九一八メートル)があり、その奥が鹿川溪谷。ここから見上げる鉾山(一、二七七メートル)は岩登りのメッカ。九州内から登山愛好者が訪れる。雄岳と雌岳二つの岩峰からなり、特に雄岳の東面は垂直二百メートルの岩壁で、登はん者も思わず身震いするという。この奥に名山・大崩山(一、六四三メートル)がある。

甲斐亮典